

ふるさとを語る

兵庫県は、5つの国から成り立っており、多彩な人材を輩出しています。そこで、毎回、さまざまな分野で活躍中の方に「ふるさとひょうご」を語っていただいています。

今回は、映画プロデューサーとしてこれまでに80本以上もの映画制作を手がけてこられた(株)タイムズインのエグゼクティブプロデューサー鍋島壽夫さんに、大久保県人会事務局長がお話を伺いました。



鍋島 壽夫

(なべしま ひさお)

赤穂市（加里屋）出身

1953年 赤穂市生まれ
1972年 県立赤穂高等学校卒業
1973年 パリ国立美術学校入学
1975年 帰国後三船プロダクション入社
現 職 (株)タイムズイン エグゼクティブプロデューサー

まず最初に、鍋島さんがこのお仕事に就かれたきっかけについて教えていただけますか。

絵を描くことが好きでしたので、もともとは画家を目指していましたが、東京芸術大学の油絵科を受験しましたが、ご存じのように、現役合格できるのは2千人に1人と、多分に漏れず失敗し、東京で浪人生活をしていましたが、縁があってフランスに留学しました。最初は、民間のアカデミーに入学し、その後、パリ国立美術学校(エコール・デ・ポサール)に入学しました。ここでは、入学した年、二ススの展覧会に出品した油絵が第2位になるなど、良いこともありましたが、気候の違いなどが体に合わず、翌年の8月から10月に日本に一度戻って過ごしていました。

それが22歳頃だったでしょうか。実家に迷惑をかけるわけにもいかないので、仕事をしようかと思いましたが、「三船プロダクション」だったので、映画のことはまったくわからなかったのですが、「美術」というポジションがありましたので、直接電話をかけたらアルバイトとして採用されたのです。その頃は、「大江戸捜査網」という番組の美術助手として、番組制作の手伝いをしていました。もう、毎日忙しくて、言われるままに働いていた感じです。その後7ヶ月ほどして、幸運にも企画部プロデューサー補佐という立場で正式に社員採用されることになりました。こんなきっかけから、映画の世界に入り、今に至っています。

今は、三船プロダクションからは独立されてお仕事をなさっているということですが、現在のお立場を教えてください。

三船プロダクションは、私が28〜29才の時に分裂しました。私は三船プロに残ったのですが、後に更に分裂することになります。三船プロはこれで実質的に映画を作るのを辞めることになりましたが、この時、三船プロは防衛庁から広報映画の

制作を受注していたので、私がプロデューサーとして防衛庁に納品しました。その後、松竹から映画制作の依頼があって「ライトビジョン」という制作会社を立ち上げ、この会社で7年近く松竹映画から受注をしていました。その後、東映で7年、角川映画で7年それぞれプロデューサーとして働いた後、フリーでの映画制作活動を経て、現在は三船プロから分かれた映画制作会社である「タイムズイン」の役員兼エグゼクティブプロデューサーとして映画制作活動をしています。こうしてみると、日活以外の日本の映画会社すべてに関わっていることになりましたね。

手がけられた映画は劇場用だけでも80本以上とのことですが、その中でも印象に残った映画は何ですか。

1987年に手がけた「TOMORROW 明日」(1988年、主演・桃井かおり、監督・黒木和雄)という、長崎に原爆が落ちる1日前を描いた作品です。原作は井上光晴さんと、全国学生読書感想文課題図書になっています。私自身がちょうど初めての子供が生まれた時だったのですが、作品では、主演の桃井かおりさんがやっつこととで、子供を産んだその4時間後に原爆が落ちるストーリーになっていきます。原作の発表後も、読者から原作者に、この子の生死を問う質問が多く寄せられたそうです。この作品は、映画会社から請負った仕事ではなく、自分でお金を出して、自分が作りたい作品を作ったという意味で、一番印象に残る作品です。

子供の頃など、赤穂でのふるさとの思い出などはありますか。

田舎の育ちですが、絵が好きでいつも絵を描いていました。小さい頃から、みんなにも絵がうまいと言われて過ごしましたし、実際、絵画コンクールなどでも出品すれば必ず賞ももらっていました。ですから、自分自身も絵描きになると思っていましたし、周りもそう思っていたと思います。

高校時代美術部に所属していた時にも、一般の展覧会で首席を受賞しましたから、東京芸大も合格するものと思っ

ていましたが、そんなに甘いものではなかったですね。その後、赤穂から東京に出てこられますが、東京ではどんな生活をされていたんですか。

1年間、池袋の要町の三畳の下宿で、住んでいました。そこから、予備校に通って大学を目指す生活でしたね。池袋でしたから、せいぜい上野の美術館に行くくらいで、東京にい

ても他に歩くことが無かったです。

そのころ要町に、兵庫県出身で日展の審査員もされていた藤本東一良先生が住んでおられて、この方は、私の赤穂高校時代の美術の先生の師匠でもあるのですが、幸運なことに、私の絵を見てくれたり、アトリエに入れてくれたりしていただきました。この先生とは何か縁があったのか、後にパリでも一緒にになりました。パリでもごちそうになったり、体調を悪くして迷惑もかけたりもしましたが、本当にお世話になりました。そういう面では、真面目な生活を送っていました。

今、美術についてどう思われますか。

私は、志して映画の世界に入ったわけではなく、たまたまつかんだきつけかけから、365日映画の仕事に没頭するようになって今まで来たので、65歳になって、リタイアしたらもう一度絵をゆつくり描いてみようと思っています。

普段そう絵を描く時間も無いのですが、今では昔と違う絵が描けるように思います。昔は、とにかく上手に描こうとしていましたが、今は違うでしょうね。こうして映画を作ることを通していろんなものを経験してきましたので、自分の自由な心に映るものを絵に表現してみたいと思うだけで、上手の描こうとは思いませんね。それが、唯一これまで映画をやつてきて得た教えで、それがどう絵に表れるかを楽しみたいのです。

ただし、自分に絵描きとしての資質があるのかどうかは今でも疑問ですね。

映画の話に戻りますが、映画のプロデューサーというのは、どんなお仕事なのか。監督などに比べてイメージしにくいお仕事かと思いますが。

よく、みなさんそうお聞きになります。監督とプロデューサーの関係がわかりにくいと。

映画監督というのは、演出をする人です。プロデューサーは、映画という事業のお金集めから、配給、宣伝を取り仕切る一番の責任者のことです。ですから、監督を決めたり、脚本家を決めたりするのもプロデューサーなのです。映画のチラシやパンフレットを見ると、何人もプロデューサーの名前が書かれています。これは日本だけで、アメリカなどでは考えられないことです。

プロデューサーを日本語で言うならば、「映画の企画制作業務処理係」でしょうか。

作りたい作品を決めたら、最初に監督を選び、原作者との

著作権取得交渉から始まります。次に、役ごとに俳優、女優を選ぶキャストイングをして、出演交渉をしますが、この交渉がうまく進むように、交渉役を選ぶのもプロデューサーの仕事です。もちろんプロデューサー自ら交渉にあたることもあります。「仕事で女優に会えていいですね。」と、よく言われますが、交渉は消耗戦ですからなかなか神経を使うものです。こうしたことすべてが、プロデューサーの仕事です。

プロデューサーの仕事の中で一番大変なのは、やはり「お金集め」ですね。映画の興行というのは複雑怪奇で、なかなか投資家にお金が戻って来ない世界です。むしろ儲かるケースの方が少ないです。映画の興行だけでは赤字になることが多いです。それを、DVD販売やテレビ放映などで埋めていって、何とかブレイクインプンまでもっていったらよしとする、そんな場合が大半です。出資金をドブに捨てることもあれば、大ヒットして大儲けすることもある。映画とはそんな博打のような世界です。

著名な監督とのおつきあひもあって、大変なお仕事ですが、そうした中でプロデューサーとして大切なものは何でしょうか。

まずは、「気働き」でしょうか。相手に対して気を遣うこと、細かなところに気がまわっているかということです。100人近い人間が働く現場ですから、ちよつとしたことからチームワークが崩れてしまうものです。武田信玄の「人は城」という言葉がありますが、まさにその通りだと思います。それを実行するのに必要なものが「気働き」だと思います。こうしたことは、仕事の上では「記録」には残らないものですが、一緒に仕事をした人の「記憶」に残って、次の仕事で「あの人がやるならやるよ。」と、人と人のつながりになっていくものだと思います。

それに「企画力」。私はこれには、「観察力」が必要だと思っています。人間が生きることや死ぬこと、また、今をどう生きるかということ、人の普遍的なテーマです。これに興味を持つて、常に人間の観察をしていないといけません。また、このテーマをうまく表現する仕事をするのが、小説家のようなクリエイティブな人たちです。我々は小説を作り出すことは出来ませんが、注意深い観察によって作り出された作品をチョイスするのが役目なのです。

兵庫県には、映画のロケ地になったところが数多くありますが、プロデューサーの目から見て、兵庫県の観光地を映画

のロケ地にしていくため、どうすればいいですか。

私のふるさとの赤穂市なども知的財産、歴史的財産が多くあります。例えば、全国的に有名な12月14日の赤穂義士祭も歴史的財産の一つです。

地方自治体は、みんな自分たちの町を良くしたいと思っています。それならもつとアイデアを出さないとはいけません。日頃から、自分たちの町の歴史を掘り起こして、外の人にもうやつて興味を持たせるかを考えないとはいけません。

また、映画のロケ地として考える時、映画の拠点・中心地は京都ですから、ロケ地は京都から行けるところというのが条件になります。そういう意味では兵庫県は非常にいいです。広島県にみるくの里という映画の撮影現場がありますし、山形県には庄内映画村がありますが、いずれも遠いです。それに比べると、神戸は京都から新幹線で30分、車のアクセスも良い、在阪のテレビ局もある。利便性もアクセスも整っている好条件の場所です。ロケーション、人口、文化、どれをとっても兵庫県は宝の山です。ただ知らないだけです。

姫路の書写山圓教寺は、「ラストサムライ」や大河ドラマで使われてようやく、姫路にすこいお寺があると知られるようになりました。これも、京都から行ける場所ですから、時代劇のロケ地として大きな財産です。

今、滋賀県がロケーションサービスに非常に力を入れています。兵庫県同様に京都から近く、歴史的財産も多いです。しかし、これからは、より条件の優れた神戸を中心に兵庫県がロケーションサービスを充実させ、文化発信の拠点になっていくべきではないかと思っています。

最後に県民に向けたメッセージをお願いします。

自分の生まれた土地に誇りを持ってください。私もパリにいた時、セーヌ川にたくさんの国旗が並んでいる景色を見て、その中に日の丸を見た時、ああ日本人でよかったと、しみじみ思いました。どこにいても、自分のふるさとに生まれてよかったという気持ちは忘れないでほしいです。自分のふるさとを誇りに思う人は、他の県の人からも好かれます。いつでも、どこにいてもふるさとを兵庫を誇りに思ってもらいたいと思います。自分のふるさとを誇りに思うことは、その町を良くしようという愛情につながります。たとえふるさとを離れていても、自分の生まれた県、市、町、村にいつも愛情を持って過ごしてもらいたいと思います。